



時を
 返す

至願を身成り北方領土墓参は参加出来ぬ
 皆喜ぶは皆同くであらう、しかし参加出来ぬは
 人達と思つても又ある人は居るからである
 その方達の分を代表して行かせていただく心で祖
 父の墓参を志す、三月四日の船旅も、
 云々の間過ぎて、極楽港に帰って来た時はもう
 早の時間となつた、それは又行ける約束
 出来ぬ故郷、おとうさん、おきり、おきり、
 目の前に見る故郷、必ず日本へ還
 ることを念じて祈ります。

還水墓参室
 高橋孝志

れていることから、島には缶詰工場やヨードの製造工場なども建てられ、石川県、富山県、宮城県など東北・北陸方面から多くの季節労働者で賑わっていた。高橋さんの父親も宮城県から根室に出て、島での生活を始めた一人である。昭和12年ころから、一年を通し島で生活をするようになったが、当時は流水が四島をつなげるように押し寄せるため、冬季は島を出て根室で過ごす世帯も多かった。そのころの日本は決して豊かではなく、ランプをともし仕事に追われる日々であったが、豊かな漁場が島の生活を支えていた。また、文化の違う県人でいな

勇留島床間の丘からトコマ湾を眺める。忘れることができない少年期を過ごした場所は、今も変わらない。(写真：上)

平成8年に再度参加した墓参の思い出のアルバムに、島での時間が夢のように早く過ぎ、いつ来れるか約束できないふささとへの名残を書き記した文書が、写真とともに大切に保存されている。(下)

がら、支え合う心が一つになって活気ある村をつくりあげていたことも事実である。血気盛んな少年期の高橋さんには、島全体が遊びの場となっていた。その思い出は、今もしっかりと心に焼き付いている。まさか、この島がソ連に占領されるとは、夢にも思わないことであった。

専門員の仕事を引き受けるにも、しばらく時間を要した。「島での生活を伝えること」、その一言がどんなに重要なことなのかを高橋さんは感じていた。ある日、「島に居た時に、好

きなテレビ番組は何でしたか。」と、他県からの小学生の質問に驚かされた。この質問は、高橋さんに改めて長い時間が経ったことを感じさせ、恵まれた現代の生活から、当時の生活を想像することも難しい時代になっていることを知らされた。

いかに伝えられるか、試行錯誤の毎日が続く。

納沙布岬に立ち、手を伸ばせば届きそうな島はまだ遠い。しかし、北方領土問題解決の幕開けの年となることを告げるように、北方の島々に注ぐ陽光はいつもより輝きに満ちている。

勇留島の元居住者は501人。現在では220人と減少し、北方四島全体の元居住者の生存率も45・5%を切った。返還運動は2世・3世と引き継がれているが、島での生活を語り聞くことも難しくなっている。北方領土問題は、単に元島民だけの問題ではなく、全国民がその事実を知ることから始まる。

返還要求運動の原点のまち根室で展開されるさまざまな運動は、熱い思いとともに確実に全国へと広がっている。国においても、首脳レベルの政治対話が積極的に行われ、今後の外交交渉に大きな期待が持たれる。

